

連歌の世界

伊地知鐵男

△日本歴史叢書 15▽



日本歴史学会編集

吉川弘文館刊行

略 歴

明治41年生れ。

昭和7年早稲田大学国文学科卒業。

(前職) 宮内庁書陵部図書調査官。

昭和41年以来、早稲田大学文学部教授。

著 書

宗祇 連歌論集(岩波文庫) 連歌論新集(古

典文庫) 図書寮典籍解題 桂宮本叢書 今

川了俊歌学書と研究 日本古典文学全集連

歌集 日本古文書学提要

連 歌 の 世 界

定 価 960 円

昭和42年7月20日 初版印刷
昭和42年8月1日 初版発行

＜日本歴史叢書 15＞ ©

著 者 い ち ち てつ お
伊 地 知 鐵 男
東京都中野区若宮2丁目60—9

編 集 者 日 本 歴 史 学 会
代表者 高 柳 光 寿
東京都中野区中野1丁目33—12

発 行 者 吉 川 圭 三
東京都世田谷区成城町111

発 行 所 株 式 吉 川 弘 文 館
会 社
東京都文京区本郷7丁目2番8号
電 話 (813) 9151 (代表)
振 替 東 京 2 4 4 番

精興社印刷・誠製本 (落丁本・乱丁本はお取替いたします)

はしがき

学生たちにいわせると、私ははなはだ連歌につれないのだそうだと。そんな時、私は、一体連歌の何がわからないのか、と反問することになっている。と、連歌が全然わからないのだとは、学生のプライドが許さないらしく、話はそれなりになってしまふ。大体自分自身で努力もしないで、初めから教わろうとする安易な料簡りようけんが、私にはわからないのだ。

日本中世の一時期に栄えて亡んでしまった特殊な文芸様式をもつ連歌は、これから学ぼうとする学生には、はなはだとつきにくいものらしい。今日完全に亡んでしまった連歌という文芸は、一体どんな風に詠よみあい、張行されたものか、また連歌を賦詠ふたいするにはどんな故実作法があるものか、現在、ほとんどわかっていない——というよりわかる手立てさえもわからないらしい。今から研究しようとする学生たちの眼前にたちはだかっている、こうした壁は案外大きいものらしい。そうしたことを教え導こうとする者のないのも確かに悪いことかもしれない。しかしまたその壁を自分で打ち破ろうとする意欲のない今日の

な安易な態度にも疑問がある。

戦前、福井久蔵・山田孝雄両先生の『連歌の史的研究』『連歌の道』とか、岩波日本文学講座の『連歌史』『連歌概説』などがあって、われわれはそれによって手引されたものであるが、現在そうした本さえ稀になってしまったらしい。

私はまず、そうした学生たちの前面にたちはだかる壁をやぶろうと考えて、できるだけ平易な解説と連歌の歴史を明らかにしようと思った。したがって、本書は第一、第二の両篇に分け、前篇には連歌（連句）という文芸の概説を試み、これから連歌を研究しようとする人達のための予備知識を一つの目安にあらわしたものであるが、叢書の関係上、その解説さえできるかぎり省略しなければならないものになった。後篇では、連歌という文芸の発生の基盤から始めて、平安朝期の一句連歌の性格から鎖連歌発生を導きだし、十三世紀（鎌倉期）の賦物中心の連歌の性格から十四世紀（南北朝期）の去嫌中心の連歌への移行変質とその風雅化Ⅱ文芸化を、主として連歌作家、地下連歌師たちの作品風躰を中心にしてあきらめようと試みたものである。そして十五世紀後半の宗祇におよんで筆を擱いた。ここに筆をおいたことは、とくにある意図や意味があったのではないが、連歌の文芸的

な一応の完成（といって悪ければ方向付け）は、宗砌・心敬の二人によって確立されたと考えられないこともなさそう。そして次の宗祇・兼載の時代は、この先達二人の風雅の延長線上に位置するもので、宗祇・兼載以降の歴史的価値は、もちろん連歌付合の深化、細緻化はあったにしても、より一層連歌享受層の全国的な階層的な拡がりと浸透との点におけるべきではなからうかと考える。そこには、また実力主義と物質主義にささえられた新しい享受層と新しい文化形態（俳諧）の息吹きがあった。

私の意図したものは決して大それた野望ではなかったが、それがどれほど達しえられたかはなほだ訝しいかぎりである。

昭和三十九年十一月

伊 地 知 鐵 男

目 次

はしがき

第一 連歌文芸	一
---------	---

1 連歌という文芸	一
-----------	---

2 連歌の種類——短連歌と長連歌——	九
--------------------	---

3 百韻懷紙と名処 などころ と書式	一七
-----------------------------------	----

4 賦物とその種類	二四
-----------	----

5 連歌の式目・法度	二
------------	---

6 連歌とその属性	四五
-----------	----

連歌の初め	四六
-------	----

連歌の神	四八
------	----

連歌の功徳	五〇
連歌の功用	五三
連歌張行と会席の故実 付 執筆次第	五九
発句・脇・第三以下詠みよう故実	六七
第二 連歌の歴史	六八
1 連歌(連句)発生の基盤——和歌に関連して——	六八
2 十一・十二世紀の一句連歌の性格	六八
——一句連歌から鎖連歌へ——	六八
一句連歌の性格	六三
即興から文芸性へ	六三
二人唱和から独吟・三吟へ	六七
勝負意識と前句付	一〇二
三人の贈答歌と四首一連の贈答歌	一〇五
鎖連歌の意味	一〇九
寄合・物名から賦物へ	一二三

目 次

	賦物と式目の比重	二七
3	十三世紀前半の鎖連歌	二〇
	新古今時代の堂上連歌	二〇
	その風体	二七
	その性格	二四
4	十三世紀後半の連歌	一七
	堂上連歌の風体	一七
	地下連歌の風体・性格	一五
	連歌式目の制定	一七
5	十四世紀前半の地下連歌	一五
	地下の宗匠善阿	一五
	順覚・信昭・良阿	一三
6	十四世紀後半の連歌	一九
	地下連歌師救済	一九
	二条良基の連歌歴	二五

	7
十五世紀前半の連歌界	二四七
地下の連歌師層	二四七
宗砌の生涯と著述	二五七
宗砌の風体	二七八
心敬の生涯と著述	二九〇
心敬の古人批判	二〇七
仏道・歌道一如観	三三〇
心敬の作風	三三九
十五世紀後半の連歌	三三九
宗祇の生涯	三三九
宗祇一座の百韻・千句等	三四一
古典の理會と鑑賞	三七五
	8

目 次

宗祇の連歌観	三六〇
宗祇の作風	三九〇
9 結び——連歌史の展望——	四〇七
略年表	四二五
参考資料・論文	四三六
索引	

口 絵

二条良基文和三年書状		巻頭
仁治初年 何屋何水連歌懷紙表（書止し）		巻頭
正和三年七月十九日於大宮殿 山何百韻表十句		巻頭

挿 図

弘治三年正月三日北野社裏白連歌（初折）		二三
救済法師画像		二五
伝素眼筆『菟玖波集』卷末 後光厳天皇綸旨		三一
周阿画像		三六
梵燈庵画像		四〇
宗砌法師画像		五八
宗砌筆蹟		六九
権大僧都心敬画像		七二
心敬筆蹟		三八
三条西実隆贊の宗祇像 模写		三三

目 次

『北野社引付 禪豫記』長享二年三月二十八日と四月八日の記事	三六
近衛政家宛宗祇書状	三六

第一 連歌文芸

1 連歌という文芸

わが国に古くから「尻取り」「後取り」という遊びがある。

イヌ（犬）―ヌエ（鵜）―エビ（蝦）―ヒゲマ（鰻）―マス（鱒）―スズメ（雀）―メジロ（目白）

と、詞の末尾の音と次詞の頭首の音とが同音でつづくように、詞、体言を連ねていく文字つなぎの遊戯である。おなじように室町期十五世紀半ばごろ、専ら文字鉤（鎖）という文学的な遊びが流行した。たとえば後陽成院御製と伝える『いろは文字鉤』は「色よき柘榴―轆轤ひく縄―花さける谷―庭の朝顔―仏の教へ―下手の射的……」のように尾音と頭音と同音でつなぎ、しかも連続する頭音はいろはで統一されている。こうした尻取りや文字鎖遊びは、ただ単に同音やいろは文字で連続するだけで、内容的にはなんらの関連性や連続性はない。しかしおなじ文字鎖のうちでも「源氏巻次第」とか「節会文字鉤」または「御所文字鉤」はそれぞれ『源氏物語』の巻名、

正月から十二月までの年中行事の節会名とか、御所御殿の名称を初句から順次詠みこんだもので、その意味において内容的にも統一と制約があるといえる。連歌とか俳諧とかいわれる連句文芸の形式的な基盤はこの尻取り・文字鎖の遊びと同一のものとみることができる。すなわち前の詞の末尾の音は与えられたものとして、それに同音の頭字をもつ詞を連ねるという発想、連続方式は、連句文芸の発想、創作方式と甚だ類似したものと考えられる。この尻取り遊びを、もっと美しい装いや表現をもって内容的にも深め、前句と付句との間に意味的な、情趣的な関連性・連続性をもたせたものが連句文芸である。

文字鎖は何曾何曾^{なそなそ}などとともに主に十五世紀半ばごろ室町期に流行したものではあったが、『和歌史研究会報』第八号にのせられた故堀部正二採訪にかかる『草子目録』^(冷泉家蔵)の最後の「一、雑々」の条に「文字鐏和歌 順徳 百句文字鎖和歌 蓮胤^(鴨長) 字鐏歌集問答^(ママ)」の書名がある。書名のみで内容の詳細は不明であるが、これは室町期の文字鎖と同類のもので、すでに十二世紀ごろから行われたものらしいことが判明する。

宗祇は連歌の特質を、

連歌は、先世上の雑談の返答をなすに似たり。さても昨日の風はいかめしく吹つるかな、

といひ侍らば、さこそ、いづくの花も残らず散つらめ、など、返答をしたるやうにあるべき也。又至極の後は、西といへば東と答ふるやうに句をなす物なり。〔宗祇初学抄〕

と、連歌は問答對話におなじだという。問答とは、間によって答が生れるもので、連歌もおなじように、前句の意味や表現に依じて付け合され、前句は、つねに次句の発想の場であり、前提である。連句文芸の特色もおなじく、前句の意味や情趣・調べは与えられたもの、それを発想の場として、それを基にして次の作者は自分の連想を働かせて新しい表現と世界・句境を付けすまねばならない。すなわち人々は、与えられた前句を各人なりにさまざまに理会し享受する。一応、理会鑑賞されると、その理会された心象や情趣・内容が基になって、そのなかから浮びあがるように、あるいは映発し、響きあうようにして新しい表象世界や情趣が連想される。その連想された表象世界が、美しい装いや表現をもって付句として制作されていく。たとえば、

春夏すぎて秋にこそなれ

という前句があったとする。春は夏にうつり、今は秋の季になってしまったよという驚き、すなわち季節的な流れの速さをうたったものである。従って春・夏・秋の三季の延長、冬がまず想いだされる。冬↓雪↓その白さが連想され、白さからは対照的な緑、しかも冬にも色をかえない松

の緑、雪一色に埋もれて鮮やかな対照をみせる松の緑の美しさを心象化して、

雪の頃またいかならん峰の松

と、前句にない冬の雪景色の美しさを今（秋）から想像するのである。しかし前句からの連想は、この一句だけには限らない。春・夏がすぎて、いま眼前には秋の風景がくりひろげられている。その春↓夏↓秋という季節の変化の面白さは、春の花、夏の若葉・青葉に対して秋の紅葉が連想されて、

花ちりし青葉桜の紅葉して

と桜一木にみる春、夏、秋の変化に興じることでもある。前句からの連想はそれだけではない。前句の季節的な時間の経過から、「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白川の関」という能因法師の名歌を想いだして、

都いでていく関越えつ白河や

のはるばるとした旅の詠嘆も生れうる。このように一つの意味表象しかもたなかったはずの前句でありながら、それに付ける人達の個性によって、いかようにでも変化・進展していくのである。ここに付句・付合の多様性がある。多様性といっても、ある個人一人にしか通用しない、特殊な